

播磨の古代寺院と造寺・知識集団 37

飛鳥寺「禅院」の軒丸瓦と播磨

寺 岡 洋

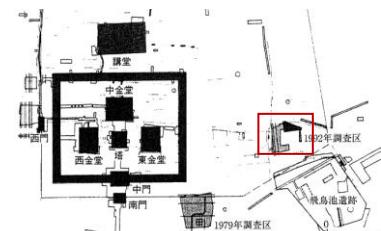
今回は奈良県明日香村に残る有名な飛鳥寺の軒丸瓦と播磨のつながりをみます。創建時の瓦ではなく、「禅院」に使われた軒瓦になる。『むくげ通信』267号に「播磨の新羅系及び傍流の軒丸瓦」を書いた時、飛鳥寺禅院（東南禅院とも）出土軒丸瓦と類似する軒丸瓦が播磨で出土していることを知ったが紹介する紙面がなく、今号も「補注編」の続編。

飛鳥寺は崇峻元年（558）から工事が始まり、610年頃には完成した日本最初の本格的な伽藍を備えた寺院である。今回取上げる飛鳥寺禅院はこの創建期の金堂や塔ではなく、7世紀後半頃に建てられた建物（禅院）に使われた軒瓦になる。

禅院を建立した道昭（どうしょう）は、唐において玄奘（げんじょう 602~664）からも囑望された僧で、出自は百濟系船（ふね）氏。玄奘は伝奇小説「西遊記」の主人公・三藏法師としてお馴染み。

道昭と飛鳥寺禅院

道昭（道照とも
629~700）の行
状については、『続日
本紀』に詳しい墓伝
記事が残る（文武四
年 700）。『日本靈異記』にも臨終の際の奇瑞が描
写されている（上巻22）。新羅の五百の虎の請いを
受け、新羅に出かけ法花経を講ず（上巻28）、とも
ある。新羅の虎は、靈異記が編まれた平安時代には日
本で広く知られていたのかも？



諸国を周遊し、民衆の教化とともに、様々な土木工事をを行うなど行基（ぎょうき）の師ともいえる僧である。「行基（668~749）は若年のころ元興寺（がんごうじ 飛鳥寺）で道照に接触したことがあったらしい」[多田1997]という推測もある。

俗姓は百濟系の船史（ふひと）、後に連（むらじ）。河内国丹比（たじひ）郡の人。周辺に居住する船・津・白猪（葛井）の三氏の祖は王辰爾（王智仁）。百濟聖明王（在位523~554）の王朝からヤマトに派遣され定住した南朝（梁）系の人と考えられている。最も早い時期のヤマト国家の政府書記官（史）である。

道昭は、白雉四年（653）、学問僧として入唐、齊明七年（661）に帰国か？天智元年（662）、飛鳥寺の東南隅に「禅院」を創建する。この後、「天下周遊十余年。路傍に井戸を穿ち、諸処の津に船をもうけ、橋を造る」と墓伝にある。

飛鳥寺禅院の遺構は、1992年、住宅工事に伴う調査で礎石建物の一部が確認された [左欄図 赤枠]。

軒丸瓦（飛鳥寺）と濃於寺（播磨飫磨郡）

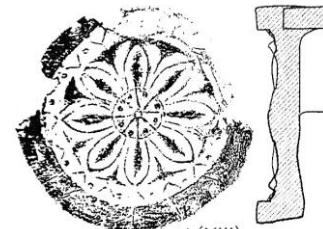
道昭は、夏安居（げあんご）のため播磨で過ごした可能性があるのではないか？夏安居は、僧が夏の三ヶ月間一定の場所にこもって修行につとめることだが、「飛鳥元興寺の僧・沙門慈應大徳が、播磨飫磨郡の濃於寺で夏安居をおこない、法花経の講義をした」と『靈異記』にある（上巻11）。

濃於寺の壇越（だにをち 寺の経済的支援者・知識）は元興寺とつながりがあったのである。道昭も播磨を周遊することはありうるのではないか。少なくとも、『靈異記』の編纂者である景戒（けいかい）は元興寺と濃於寺の関係は知っていた。

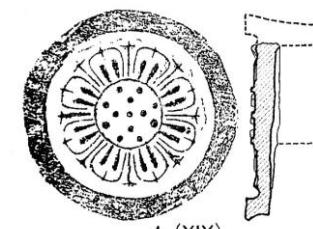
濃於寺であるが、近辺には漁夫が住んでおり、飫磨郡で海岸に立地する古代寺院址は見野（みの）廃寺（姫路市）が有力候補になる。周辺には継潮（つぎのみなど）もあり、古代寺院の立地としていい場所である。近辺には由緒ありげな新羅神社も祀られている。

飛鳥寺禅院の創建瓦

禅院創建時に使われた軒丸瓦は5型式。いずれも、幅広く高い外縁を有し、また、4型式に「竹状模骨（もこつ）丸瓦」が取り付くことが確認されている。



これらの瓦は隣接する飛鳥寺瓦窯で焼成されており飛鳥寺遺跡は当時、最先端の工房群だった [左図]。



5型式のうち、XIX型式（複弁蓮華文 右図4）に類似する軒丸瓦として「辻

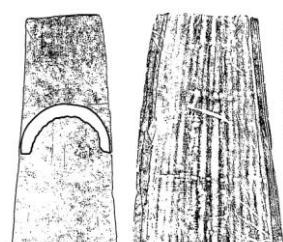
井廃寺（飫磨郡／姫路市）、野口廃寺（賀古郡／加古川市）、多哥寺廃寺（託賀郡／多可町）」例が挙げられている [花谷1995]。

XII型式（重弁蓮華文 上図1）については、既に触れているが再度紹介する。西条廃寺（賀古郡／加古川市）出土例を金誠龜氏が取上げられている。

竹状模骨丸瓦の出土例は九州に集中し、畿内では飛鳥寺禅院以外極めて稀で、播磨では繁昌廃寺（賀毛郡／加西市）で出土している。まず、竹状模骨丸瓦から。

竹状模骨丸瓦について

軒丸瓦は通常、瓦当（がとう 文様部分）に半円筒形の丸瓦を接合して作る。丸瓦と平瓦は円筒形の芯に粘土を巻き付けて作った。丸瓦はそれを二



分割し、平瓦は四分割して製品にする。粘土を巻き付ける芯のことを「模骨」といっている。

丸瓦の模骨には普通、丸太のような一木の筒を使うが、稀に細長い側板を綴じ合わせて作ったものがある。「竹状模骨」というのは細長い側板にかえて細い丸棒を綴じ合わせて作ったもので、竹を使ってるわけではない。平瓦の場合は当然ながら芯が大型になり、底の抜けた桶を伏せたような形状で、「桶」とも呼ぶ。

繁昌廃寺の竹状模骨丸瓦 →

1点のみの出土である。凹面に棒状の側板跡と綴じ紐の圧痕を残す。ただ、飛鳥寺禅院でみられる竹状模骨丸瓦と接合する重弁軒丸瓦も、外縁が幅広い複弁八弁軒丸瓦も確認されていない。そこで、「1点の出土であることを考えると、周辺の寺院から持ち込まれた可能性がある」として、上記の3ヶ寺が挙げられている [花谷1995]。



49

辻井廃寺の軒丸瓦

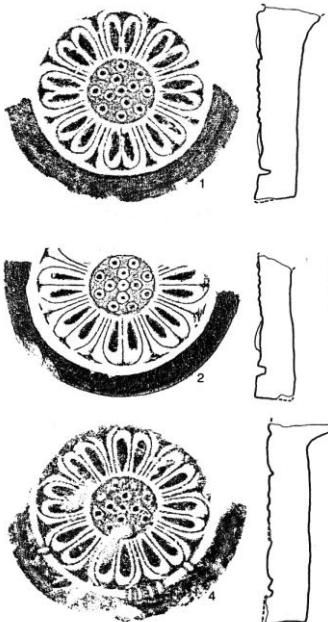
飛鳥寺禅院創建軒丸瓦について、発掘を担当された花谷氏は「誰しも気づく特徴は「幅広く高い外縁（直立縁）」にある。この特徴は、7世紀後半の複弁蓮華紋軒丸瓦、つまり川原寺式に始まり、紀寺式・本薬師寺式・藤原宮式へと続く、三角縁（斜縁）の系譜とは相容れない。…むしろ、唐あるいは高句麗の軒丸瓦との関連が強いよう私には思える。…」

と書かれる。辻井廃寺の軒丸瓦について、「この軒丸瓦が〔飛鳥寺XⅢ型式〕に類似することは一見して明らかであろう」と指摘された。

辻井廃寺の軒丸瓦について今里幾次氏は『姫路市史』において、I期（創建時）とII期に分類し、さらにI期を中房の蓮子の形態により、I類→IIa類→IIb類と細分された [上図 上から順]。

IIa類は市之郷廃寺

（姫路駅の東1.5km）
IIb類は辻井廃寺から6kmばかり西北の赤坂窯跡（峰相山窯跡群／姫路市）から同範例が出土している。 [↑ 市之郷廃寺]

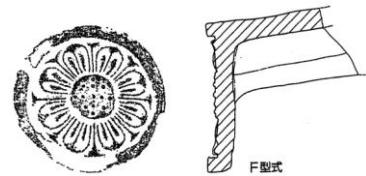


辻井廃寺の南、約1km地点には山陽道・草上（くさかみ）駅家推定地（今宿丁田遺跡）が位置する。

辻井廃寺の所在地は『播磨国風土記』の「巨智里（こちのさと）」になる。「韓人山村等が上祖、柞（なら）の巨智の賀那」の居地であり、巨智氏が建立を主導した知識寺院と考えられる。峰相山古窯跡群は、「漢人（あやひと）」が経営した窯跡群であることに異説はない。

多哥寺廃寺

多哥寺廃寺は5型式（A～F）の軒丸瓦が出土しており、F型式が該当する。



ちなみにA～C型式は日本で類例が見当たらず、E型式は、中房が十字に区切られ、蓮弁はパルメット文という、超レアな軒丸瓦。

F型式を除く他の軒丸瓦には、枠板連結模骨丸瓦が接合され、類例が少ない。

野口廃寺の軒丸瓦

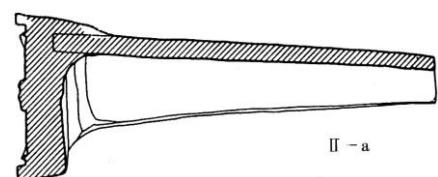
発掘調査では報告されてない [加古川市2004] ので主要な軒丸瓦ではないであろう。



西条廃寺の軒丸瓦

飛鳥寺XⅢ型式（中房の分割）と関連する西条廃寺（賀古郡）の軒丸瓦に移る。

発掘調査報告書記載の、軒丸瓦II-a. b（単弁八葉蓮華文）で、同文であるが、範が異なる。



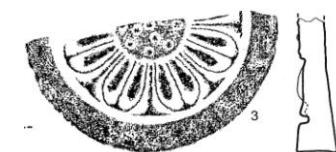
「高く突出した小さい中房を凸線にて十字に区切り、4個の蓮子を配する独特な瓦である。

…出土軒丸瓦の中で最も多く、西条廃寺の主用瓦と考えられる」、「軒丸瓦の文様は、この二者（軒丸瓦IとII）ともに高句麗系統の瓦の影響を受けている」とも指摘されている [加古川市1984]。

金誠龜氏 [1995] は、「軒丸瓦の中房がいくつかの線刻で区画される」例として、慶州の皇龍寺址や雁鷗池東宮址と、飛鳥寺、西条廃寺例を挙げられた。

高田貴太氏 [2012] も飛鳥寺禅院XⅢ型式の軒丸瓦について、「中房を凸線で区画し、その間に蓮子を飾る」特徴をもつ軒丸瓦は、「高句麗や新羅に特有のものであり、…出土例は枚挙にいとまがない」と書かれている。

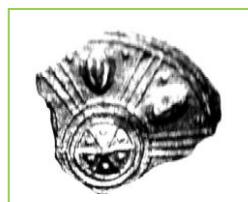
*引用・参考文献はむくげの会HPを参照して下さい



3

引用・参考文献

- 寺岡 洋 2014 「播磨の新羅系及び傍流の軒丸瓦」
『むくげ通信』267 むくげの会
- 花谷 浩 1995 「丸瓦作りの一工夫」
『奈文研 文化財論叢Ⅱ』 同朋舎出版
- 花谷 浩 1999 「飛鳥寺東南禅院とその創建瓦」
『瓦衣千年 —森郁夫先生還暦記念論文集—』
- 多田一臣校注 1997 『日本靈異記』 ちくま学芸文庫
- 加西市教育委員会 1987 『播磨繁昌廃寺—寺跡と古窯跡』
- 鎌谷木三次 1942 『播磨上代寺院跡の研究』 成武堂
- * 花谷氏が例示されたのは、鎌谷氏史料である
- 姫路市 2010 『姫路市史』 第七巻下 資料編 考古
- 中町教育委員会 1995 『多哥寺遺跡』 中町文化財報告9
- 中町教育委員会 1997 『多哥寺遺跡Ⅱ』 中町文化財15
- 加古川市教育委員会 1984 『西条廃寺—発掘調査報告書—』
- 加古川総合文化センター 1990 『奈良・平安時代の出土遺物』
- 井内 功・井内 潔 1990 『東播磨古代瓦聚成』
井内古文化研究室
- 加古川市教育委員会 2004 『野口廃寺 発掘調査概要報告書』
- 金 誠 龜・(訳) 武末純一 1995
「古代日本の新羅系軒丸瓦について」
『青丘学術論集』第6集 韓国文化研究振興財団
- 高田貴太 2012 「瓦からみた7世紀の日羅関係について
の予察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第167集
- 龜田修一 2010 「日本の重弁蓮華文軒丸瓦と朝鮮半島の瓦」
『古代瓦研究 V』 奈良文化財研究所
- (注) 飛鳥寺XⅢ型式軒丸瓦について龜田氏は、「外区内縁の鋸歯文など異なる点はあるが、中房の表現はまさに平壤西城里（下図）そっくりであり、蓮弁も蓮蕾文が変化したものと考えて問題ないものである」と指摘される。



さらに、竹状模骨丸瓦について、「……特異な高句麗系の文様を持つ飛鳥寺の軒丸瓦に、縄目タタキが一般的に施されている竹状模骨丸瓦が接合されていることは、やはり重要である」とされ、「この竹状模骨丸瓦自体、日本の在来の瓦の中から自生したものではなく、朝鮮半島からの新しい技術伝播によるものと筆者は考えている」と記述された。
(p.114)